

江戸琳派の全貌
酒井抱一と

生誕250年記念展



酒井抱一と江戸琳派への親しみ

今回、当館は、姫路市立美術館と細見美術館の協力を得て、まさしく空前の規模の、酒井抱一と江戸琳派の特別展を開催する運びとなりました。江戸時代の絵画史を研究領域としてきた私にとって、これまで格別の関心を寄せてきたこの一派の画家たちの作品と関係資料が、総数338点もの多く集めることを得たこの快挙を、大いなる喜びと、また驚きとをもって、受けとめています。代表的な名品はもとよりのこと、これまで公にされることのなかった新出品も数多く展覧に供されます。こうした予想外の壮観は、細見美術館の岡野智子さん、そして当館の松尾知子さん、二人の学芸員の数年間に及ぶ調査の結果が実現させてくれたもので、その並々でない献身と労苦とを心から称えたいと思います。

今年2011年に生誕250年の記念すべき周年を迎えた酒井抱一(1761~1828)は、江戸時代後期、いわゆる化政期(文化・文政年間)を代表する画家であり、文化人でした。在世中は、姫路藩15万石の藩主酒井雅楽頭家の次男として人々から尊崇を受け、絵画や書、俳句や狂歌などの才能がまぶしく仰がれた存在でした。門弟を育てることに秀でて、その絵所雨華庵から抱一流の画風を継承した画家たちが輩出、さらに孫弟子らによって明治期にまで繁栄する画系の開祖となりました。俵屋宗達や本阿弥光悦、尾形光琳・乾山兄弟らによって育てられた京都の琳派風に私淑の想いを熱く捧げながら、それとは別種の趣を加えた独自の絵画様式を確立、その流風を愛でて「江戸琳派」という流派名を私がおはじめて与えたのも、すでに遠い昔のこととなりました。

思い返せば、抱一とその一派の画家たちに再評価の兆しが起こしたのは、昭和47年(1972年)秋に東京国立博物館で開催された「創立百周年記念特別展 琳派」展からだったかと思われます。当時の同館幹部、学芸部長千沢積治、美術課長小松茂美両先生によって指揮され、本館2階の全10室を使っての大規模かつ総合的な琳派展でしたが、その最後の2室を抱一と江戸の琳派画家に割り当ててくれたのでした。絵画室の若き学芸員であった私は、期待に応えるべく張り切って、国の内外から可能な限りの優品を集めようと努力したものでした。東京国立博物館には《夏秋草図屏風》【表紙】や《四季花鳥図巻》【P.4 図3】のような抱一の代表作が所蔵されていますが、鈴木其一をはじめとする弟子たちの作品にはめばしいものがほとんどありません。そこで、ハワイのホノルル美術館から其一の《梅椿図屏風》、そして前年の「伊藤若冲展」でお世話になったジョウ・プライスさんからも再び助けをいただいて、かなりの名品を集めることが出来ました。それまで一般には未知の領域だった酒井抱一と江戸琳派に対して、新鮮な関心が寄せられ、注目される機会となったのでした。

私自身もこの特別展に関わることによって抱一画系への興味をかき立てられ、以来、主要な研究課題の一つとするようになったものでした。折しも恩師の山根有三先生によって『琳派絵画全集』(全

5巻、日本経済新聞社刊)が企画され、その第5巻『抱一派』(昭和53年刊)の編集担当に抜擢されたことも、私の江戸琳派研究にいったいその拍車がかかる契機となりました。さらにそうした延長線上に、畏友榊原悟さんと一緒に立ち上げた「酒井抱一と江戸琳派」展(昭和56年にサントリー美術館で開催)などもあり、一時期は抱一と江戸琳派の美術に夢中になったものでした。

そもそも、私の抱一画や其一画との親密な接点は、後に細見美術館を開館することになるコレクター細見實さん(故人)によって多く与えられたものでした。細見實さんは厳父細見良さんが宗教美術や茶の美術に親しむなど古典志向が強かったのに対して、若冲や抱一など江戸時代絵画にひとかたならない興味を寄せていました。いまだ江戸ブームが起こる以前のことでしたから、具眼の氏によって多くの名画が発掘されました。それらの新たに見出した作品を嬉しそうに私に見せてくれた場面が、今でも懐かしく思い出されます。今回、細見美術館から出品されている数多くの作品はほとんど、かつて實さんの手に入った直後に拝見したものです。抱一上人ならではの仏教的な観念が、淨らかに、また美しく絵画化された《白蓮図》(図153)は、たしか喫茶店の店内で見せられたように記憶しています。意見を問われた形ではありましたが、細見さんの本音は、名画を入手した誇らしい気持ちを、一刻も早く同好の私に伝えたかったのでしょう。この展覧会を亡き山根先生や細見實さんに見ていただきたかったものと、しみじみと思われています。

さて、抱一と江戸琳派の絵画世界の見どころについて、簡単に触れておきましょう。

抱一が描く草や木の花や葉には、代表作の《夏秋草図屏風》のように夏の雨や秋の風が当たり、あるいは《四季花鳥図巻》の巻頭、巻末のように、春の暖気が通い、冬の雪がおおうなど、季節や気象の変化が表情を加えています。その辺りは、草木を青天白日のもとにさらし、美しさの極点でとらえようとする宗達や光琳の作風と本質的に異なるところです。それこそが、和歌の雅よりもいっそう俳諧の俗を愛した、屠龍の俳号をもつ抱一の絵画世界の特質だと思われます。菜の花と楓という春秋を代表する景物にそれぞれの季節特有の雨を降らせた其一の《雨中菜花



鈴木其一《雨中菜花楓圖》双幅のうち 左 個人蔵

楓図》双幅(図231)なども、いかにも江戸琳派らしい、俳諧的な詩情を横溢させた逸品として推奨できるものです。

俳諧の精神はまた、既成の見方を逆転するような意外性をはらみ、軽いユーモアを盛った機知性を貴ぶところがあり、江戸琳派の美術に随所に現れていると良いでしょう。なかでも分かりやすい例が、描表装作品と微小な形態の小品群です。

描表装は、もともと仏画の表装に使われてきたものでした。僧侶が着る袈裟をいくつかの布を縫い合わせて作ったように、おそらくは質素を旨として、時には紙に模様を描いて仏画の周囲を飾ったのでした。

西本願寺門跡の文如上人に弟子入りして得度、^{ごんたいそうず}権大僧都(大僧都に次ぐ僧綱位)の位を得た抱一上人は、仏画の揮毫を求められることも度々あったようで、少なからぬ作例が残っています。それらの仏画の内には、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の光明皇后御筆と伝える妙音天像を復元模写して、周囲に波濤の描表装を加えた《妙音天像》(図142)があります。愛妾の小鸞女史が題した《海印発光》にある年記「文化甲戌春日」から文化11年(1814)春の制作と知られるこの図などが、抱一の描表装作品の初めかと思われます。その3年後に描かれた^{しょうめんこんごうず}《青面金剛図》(図143)では、あたかもだまし絵のように、本物の^{きれ}裂と見まがうばかりの精巧な描表装が加えられています。

抱一上人が、仏画の伝統に従って試みた描表装は、門弟たちの世代になるとだまし絵の遊戯性をいっそう増していきました。其一とその子守一による《業平東下り図》(図309,310)など、『伊勢物語』第九段「東下り」で詠まれた和歌、「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか 鹿の子まだらに雪の降るらん」にちなんで四季の花を画面の周囲に描くという、裂と見まがうように描くべしとする描表装本来の意義を遠く逸脱する方向へと走って行ってしまっています。

其一の《三十六歌仙図》(図311)のような目がくらむほどに色鮮やかな作例をはじめ、この展覧会には江戸琳派画家たち各人各様の描表装作品が数多く集められましたので、存分にお楽しみいただけるものと思います。

遊戯性ということであれば、通常のサイズと比べて微小な形式を取ってとった作品群も特筆されます。抱一の、短冊に1年12ヶ月の花卉を描き分けた例(図172)や、直径わずか六センチの円窓画面にやはり12ヶ月月次の花を描いた^{つきなみ}豆画帖(図173)などがありますが、門人たちも好んで極小画面に挑戦しています。其一の《四季歌意図巻》4巻(図287)などは、画面の縦が10センチしかない豆絵巻であって、抱一一門ならではののお茶目な遊び心がもたらしたものでした。

名門大家家に出たお殿様酒井抱一は、一方でまた、輝くばかりに豪華であったり、ゆったりとして大らかな作品も残しています。前者を代表するのが、心酔する尾形光琳の原作を紙本から絹本に変えて描いた《八橋図屏風》(図78)であり、後者が各種の《十二ヶ月花鳥図》(図162,163,164~166ほか)や最近明らかにされた二条家旧蔵の名作《月に秋草図屏風(もと襖)》(図170)でしょう。いずれも金や銀、濃厚上質な岩絵具をたっぷりと贅沢に使って、どこにも汚れや貧しさが入り込む余地のない、豊かで晴れやかな装飾美が謳歌されています。

時に雅であり、時に通俗的な親しみをもつ酒井抱一と江戸琳派の多様な絵画世界を、存分にお楽しみいただける特別展になったと自負されます。皆様のふるってのご来場を、館員一同とともに心よりお待ち申し上げております

[館長 小林 忠]

*文中の(図)は、本展図録での作品番号です。

生誕250年記念展

酒井抱一と江戸琳派の全貌

酒井抱一(1761~1828)は、名門譜代大名の出身ながら江戸の市井に身を置き、宗達、光琳が京都で築いた琳派様式に新しい好みや洗練度を加えた今日「江戸琳派」と呼ぶ新様式を確立した江戸時代後期の絵師です。本年は抱一の生誕250周年にあたるということで、琳派コレクションを有する館が続々と琳派展を開催して年が明けました。それらを合わせての報道に接した方も多くでしょう。しかし東日本大震災を経て、それが同じ年とは思えないくらい遠くの出来事のように感じます。あれから半年。それぞれのご事情や思いを超えて引き続き本展に出品のご協力を賜った所蔵先の機関、個人の皆様はあわせて100近くと、本当にかつてなく多数にのぼりました。展覧会は先般、姫路市立美術館にて立ち上げることができましたが、いよいよ秋10月、当館にてオープンの時が迫っています。抱一以後の約200

酒井抱一(1761~1828)は、名門譜代大名の出身ながら江戸の市井に身を置き、宗達、光琳が京都で築いた琳派様式に新しい好みや洗練度を加えた

年を敬意と愛着をもって伝えられてきたそれぞれの作品が、300点以上も一堂に会すことに、何時にも増して格別の思いが致します。

抱一といえば、宗達、光琳につづいての琳派の三番手として、《風神雷神図》などの継承されたモチーフや、燕子花の図など、金銀や極彩色の華やかな花鳥画の世界を思い浮かべる方が多いでしょう。以前は江戸趣味の高い一定の鑑賞者のなかで深く寄せられてきた愛好でしたが、近年では「江戸琳派」の呼称で一般によく知られるようになり、さらに、弟子の鈴木其一(1796~1858)の人気とも相まって、認識が広がっています。

本展は、酒井抱一とその一門に集中した回顧展としてほぼ30年振りに総合的に行われる大規模な展覧会です。抱一研究は飛躍し、個々の作品紹介も着々と進められてきましたが、今回は「琳派展の最後の一角」ではない展覧会だからこそ、多岐にわたるそれらの成果も盛り込み、抱一の柔軟性のある多彩な魅力を堪能していただけたと思います。以下順を追って内容をご紹介します。(会場の構成は一部異なります)



【図1】
山東京伝画『吾妻曲狂歌文庫』
天明6年(1786)
千葉市美術館ラヴィッツコレクション



【図2】
酒井抱一『松風村雨図』
天明5年(1785) 細見美術館蔵

作品は、年齢があり最も早い25歳の作とわかる《松風村雨図》(細見美術館蔵)【図2】から始まります。酒井家で兄宗雅のもとから愛蔵してきたものです。同時にこの作品が、本展を共同で開催の運びとなった京都の細見美術館が誇る江戸琳派コレクションに、核として在ることも大変象徴的に思えます。ほかにも約30年ぶりの公開となる《美人猿狩図》などにじっくり向き合えば、若き御曹司の気まぐれや嗜み程度を超えた、その本気モードにあらためて感じ入ることでしょう。

さて、抱一は藩主の兄も早くに亡くし、37歳で出家します。こ

本展の特色の一つは、**第一章「姫路酒井家と抱一」**を設け、酒井家ゆかりの品々により、抱一を生んだバックグラウンドを丁寧に紹介することにあります。絵師ながら抱一の経歴がかなりわかるのは大名家の史料があったからであり、藩主の弟という抱一の立場ゆえです。今回、兄忠以(宗雅)による日記のほか、抱一の基本史料、すなわち姫路にとっての最重要史料を多数ご出品いただいております。これがあの実物かと思える充実があると思います。抱一の出自をひしひしと感ずることができる、お国元姫路からの開催ならではの特色です。実は抱一その人は江戸に生まれ、姫路には数え21歳のときに兄に伴い約半年滞在したことがあるだけで、全くの江戸人といえますが、37歳で出家してのちも酒井家との関係は保たれ、その文化的環境は当然ながら抱一の礎でした。ちなみに本展は約5年前、姫路市立美術館から当館に立ち上げの声をかけていただいたことから始まっています。姫路市立美術館は、約25年前に「酒井抱一展」で開館したという館なのです。

次に、**第二章「浮世絵制作と狂歌」**として、抱一が20歳代の頃に本格的な肉筆浮世絵を描いたり、「尻焼猿人」の名で狂歌壇にも加わったことに触れます。当時の狂歌絵本には「尻焼猿人」が多く登場、青年期の面影を伝えるものもあります【図1】。抱一の絵画

の人生の大きな転機と行く末を思索する中で急速に傾倒していくのが、尾形光琳(1658~1716)の作風でした。**第三章「光琳画風への傾倒」**では、出家前後の30代半ばから、晩年期の光琳写しの大作《風神雷神図屏風》(出光美術館蔵)まで、光琳画風との関係の軌跡をたどりますが、琳派様式を手探りで習得していく段階を示す新しい資料の数々は、その手探り加減も印象深く本展のひそかな見所です。抱一が一直線に光琳画を写し得、光琳画風に進んだわけではなかったことが、幅広い関心の諸作や試行錯誤の作風からわかります。そうした中から抱一は文化12年(1815)の光琳百回忌を迎えるにあたり、血縁でも弟子でもないのに法会を行い墓所に観音図を奉納するばかりか、光琳周辺をたどって「尾形流」として系譜にまとめ、遺墨を集めて展覧を催し、記念絵画を制作し、『光琳百図』という作品集まで出版したのです。この一大事業にけるエネルギーと意志には認識を新たにすべき強さがあると改めて思われます。

光琳風だけでない多様な作画は、抱一を取り巻く江戸の市井の文化状況を色濃く反映しており、抱一の画技に期待した人々との関係や、抱一の人間像も垣間見ることができます。**第四章「江戸文化の中の抱一」**では、抱一にとり終始大切な居場所であった吉原をめぐる作品や、多彩な交友範囲を伝えるもの、その中で近しく鑑賞された画賛物なども取り上げます。大文字楼の花魁から請け出されて伴侶となった小鬢女史との《紅梅図》(細見美術館蔵)もうわしき合作であり、また「柳花帖」(姫路市立美術館蔵)のような俳画集は、本展ならではの出品です。大作で珍しい《隅田川窯場図屏風》(DIC川村記念美術館蔵)など、瓦焼にこれほど焦点を当てるとは、近辺の者にしか意味を成さぬ臨場感溢れる作画ではないでしょうか。あるいは幕末期の復古的思潮に応えたやまと絵の作例もあります。図版での再現が非常に難しく物足りないものになってしまいがちな、抱一のやさしく丁寧な細部描写やそのニュアンスを、ぜひ実物で味わっていただきたく思います。

第五章「雨傘庵抱一の仏画制作」もまた、本展において特に意識的に提示するコーナーです。出家した抱一は自らの立場をよく認識しており、「画僧」とも名乗り、数々の仏画を実は熱心に手がけています。一門の主要なジャンルにもなった仏画を積極的に含めていこうと考えたことは、本展の方向性やカラーを決める核ともなりました。

そしてよいよ**第六章「江戸琳派の確立」**において、《四季花鳥図巻》(東京国立博物館蔵)【図3】、《夏秋草図屏風》(東京国立博物館蔵重要文化財)【表紙】から、晩年の《十二ヶ月花鳥図》(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)などをご覧ください。没する2年前、65歳の年紀のある大作《月に秋草図屏風》が新出し、初公開となることにもご期待いただきたいところです。図録もそうでしたが展示についてもこの配置が一番の悩みどころで、今もって七転八倒の検討中です。隔々まで配慮が行き届いており見れば見るほど胸を打たれる《四季花鳥図巻》が完成したのは、光琳百年忌から三年後の文化15年(1818)のこ

【図3】 酒井抱一《四季花鳥図巻》(部分) 文化15年(1818) 東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives Source:http://TnmArchives.jp/ (10/10~10/30展示)





【図4】 鈴木其一《松島図戸袋》 二面 個人蔵

とでした。要素の多い本展の会場で、これらよく知られた代表作がどんな風に見えてくるのでしょうか。

そして第七章「**工芸意匠の展開**」では、抱一がデザインに関わった工芸的作例の広がりを取りあげます。中でも蒔絵師の原羊遊斎(1769～1845)に下絵を提供して、江戸の高級ブランドとして人気を博した蒔絵の作品は、抱一一門の情報も満載の羊遊斎下絵帖とともに展示します。極小の豆画帖から、希少な描繪の小袖(重要文化財 国立歴史民俗博物館蔵)のように非常に力強い筆致を示すものもあり抱一イメージがふくらむことでしょう。

さて、つづく第八章「**鈴木其一とその周辺**」、第九章「**江戸琳派の水脈**」において、多数出品される江戸琳派の作品も本展の見所で、鑑賞の余力をたくさん残しておいていただきたいところです。鈴木其一や池田孤邨など抱一の弟子たちの幕末の活躍は近年注目されていますが、中でも一番手で作品数も群を抜いて多い鈴木其一については、「**噂々**」の号を用いた時期の意欲的な作品を中心に初期から晩年まで約60件を展示します。直近でも注目の作品、例えば《松島図戸袋》【図4】が新出するなど、未知の領域はまだまだ広くその鬼才ぶりが実感されます。其一が自らを「画狂」と称した資料が出てきたことにも驚かされました。

抱一以後100年の命脈を保つ江戸琳派の総体をこの規模でとらえ

ようとするのは本展が初めてのことです。ここでは抱一の弟子筋など系譜が明らかで自らも意識的な江戸東京の画家たちを「江戸琳派」の対象としましたが、ある程度それぞれの個性までとらえられるよう実作品をもって示したいと考えました。ある者は図案制作の場で、またある者は抱一継承を謳いあげるなど、移りゆく時代の中でどのように生き得たのか、彼らが先師抱一に対して抱いた敬意もお伝えできればと思います。

かつて抱一の芸術を敬愛してやまなかった日本画家の鑷木清方(1878～1972)は、「通人の作ったといふ様な洒脱な方面ばかりではない」と《夏秋草図屏風》を指して、「今一層斯の如き真剣に研究的態度に作品を数多く残してほしかったのである。」という言葉ものこしました。「時代は上人に斬様な作品を多く作る事を許さなかった」と。(鑷木清方「抱一の画風」『書画骨董雑誌』129 1919年) 抱一の多様性を一門の全貌とともに力いっぱい顕わにしようとする本展においてはどのようにとらえられることでしょう。あらためて、その全体のなかから選ばれた琳派様式への傾倒の強さや、屹立した作品が生まれたことへの感慨が深くなることを思い、また願っているところです。

[学芸員 松尾知子]

関連企画

■オープニングトーク

第一話「抱一に魅せられて―細見コレクションと江戸琳派」

【講師】細見良行(細見美術館館長)

第二話「酒井抱一の大回顧展に寄せて」

【講師】岡野智子(細見美術館上席研究員)

10月10日(月・祝) 13:00より / 11階講堂にて / 聴講無料 / 先着150名

■記念講演会(すべて事前申込制 聴講無料 / 定員150名)

「鬼才・鈴木其一の魅力」

10月23日(日) 14:00より(13:30開場) / 11階講堂にて

【講師】河野元昭(秋田県立近代美術館館長) *申込締切10月14日(金)[必着]

「酒井抱一と下谷」

10月30日(日) 14:00より(13:30開場) / 11階講堂にて

【講師】河合正朝(慶応義塾大学名誉教授) *申込締切10月21日(金)[必着]

【申込方法】往復はがきに郵便番号、住所、電話番号、氏名、参加希望の企画、人数(各2名までお申込可)を明記の上、下記までお送りください。応募多数の場合は抽選となります。*はがき1枚につき1企画のお申込
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 企画係

■市民美術講座

「酒井抱一と江戸琳派～新出資料紹介を中心に」

11月6日(日) 14:00より / 11階講堂にて / 聴講無料 / 先着150名

【講師】松尾知子(当館学芸員)

■ギャラリートーク

・担当学芸員による 10月12日(水) 14:00より

・ボランティアスタッフによる

会期中毎週水曜日(10月12日を除く) 14:00より

*水曜日以外の平日の14:00にも開催することがあります。

生誕250年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌

2011年10月10日(月・祝)▷11月13日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 10月24日(月) / 10月31日(月)

【観覧料】 一般 1,000(800)円, 大学生 700(560)円

*小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

*()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

*前売券はローソンチケット(Lコード: 33788)、セブンイレブン(セブンコード: 013-267)千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(11月13日まで)にて販売

※ 10月18日(火)は「市民の日」につき無料開放

※リピーター割引をご利用ください。本展チケット(有料)の半券ご提示で、2回目の観覧料が半額になります。

千葉アートネットワーク・プロジェクト
WiCAN 2011



アートからはじめる学校プロジェクト

WiCANプロジェクトは、建築家の曾我部昌史さんとともに余裕教室の活用案をアニメーションと冊子にまとめた昨年度の活動をふまえて、この秋、いよいよ実際の教室に舞台を移します。千葉市内の小学校に協力していただき、今までにない教室空間の実現に取り組みます。詳細は、<http://www.wican.org/> をご覧下さい。

グリーンカーテンに挑戦！

美術館ではこの夏、グリーンカーテン作りに挑戦しました。超高層グリーンカーテンはうまくいくのでしょうか？

5月20日
10階事務室外のベランダにゴーヤを植える土袋を設置！ゴーヤとフウセンカヅラの種をまきました。

6月3日
芽がでて、こんなに大きくなりました。ゴーヤとフウセンカヅラの違いがわかりますか？

6月14日
ツルが伸びはじめました。この頃になると、葉の違いがよく分かりますね。大きく広いものがゴーヤです。

6月29日
ツルを支えるために、上階からネットを張りました。うまく伸びてくれると良いのですが…

7月7日
花が咲き始めました！1日で4〜50ほどの蕾がつかます。

7月7日
花が咲いたと思ったら、葉に隠れて小さな実がなっていました。グリーンカーテンのためには実はいらないのですが、この1つだけは育てることに。

7月9日
梅雨が明けて、夏本番。成長が早くなっています。この頃は1日で10cmほど伸びていました。

7月12日
すでに身長を越すほど伸びているものも。

7月21日
カーテンがこんなに濃くなりました。フウセンカヅラの白い花もたくさん咲いています。

7月22日
1つだけ残っていたゴーヤが食べ頃！全長20cm、立派に育ちました。

7月22日
収穫したゴーヤをシーチキンと和えました。職員全員で少しずつまみ、完食。とても美味しかったです。

ゴーヤを食べるところで報告は終わっていますが、グリーンカーテンはその後も成長しました。

今回の成果としては、カーテンによって地表と葉影で温度差が7℃になり若干直射日光が遮られたこと、見た目が涼しげになったことがあげられます。しかし、プランターでなく土袋で育てたことによる栄養不足や、高層であるために地上よりも風が強いこと、直射日光や地面からの放射熱などで葉が茶色になってしまうなどの問題も。次回から窓全体に葉が覆うような形でカーテンを作る、プランターに変更するなど様々な改良が必要ということが分かったことは、最大の収穫でした。来年も挑戦したいと思います。

デイリリーアートサーカス 2011



8月18日(木)、美術館1階さや堂ホールに「デイリリーアートサーカス 2011」がやってきました。これは美術家の開発好明さんが企画された、東日本大震災復興支援のためのプロジェクト。木村崇人さん、吉澤美香さんなど7名のアーティストが作品を出品・参加されています。特徴的なのは、トラックに作品を詰め込み、西日本から東日本30カ所を巡回して展覧会を行うこと。スタート地点は兵庫県、目的地は宮城県や福島県の被災地です。各開催地の人々が被災地のことを思いながらこのイベントに参加することで、アートを通じて心の繋がりを伝えようというのが、開発さんの志したコンセプトです。

展示では、高橋士郎さんの「やわらかい彫刻」(右写真参照)をはじめ、楽しい作品でさや堂ホールがいっぱいに。また、巡回先で新しいメッセージが書き加えられてゆく作品もありました。小さいお子さんから高齢の方まで、幅広い年代の方楽しんで頂いた1日、



参加された方々の気持ちで被災地の皆さんを勇気づけられる事を願っています。「デイリリーアートサーカス 2011」のホームページでは、各地で行われた展示の様子も掲載されています。
(<https://sites.google.com/site/daylilyartcircuswebsite/>)
こちらもぜひご覧下さい。

ボランティア日和 番外編



展示室で作品鑑賞に取り組む(6年生)

ある小学校の先生から「アートカード」(作品画像の裏に基本データが記載されたもの)についての問い合わせがありました。その受け答えの中で、

私が小学校で6年生の担任をしていた15年ほど前の授業がよみがえってきました。

「美術館で作品を見て、感じる授業をしたい」と願うものの、まだ、美術館と学校の距離は程遠い頃です。勿論、「アートカード」の存在すら知りませんでした。そこで、美術鑑賞用絵本を色々な図書館から借りたり、書店や美術館に足を運び、絵本や美術作品の絵ハガキを買い集めたりして授業を組み立てました。子どもたちはその中から自由に気に入った、または、気になる作品を選び出し、じっくりと鑑賞しました。いえ、鑑賞というより、読み取りでしょうか。その後、画家になりきって模写したり、自分の表現に取り入れたりするという授業です。教室という狭い空間でしたが、「目でみて・心で感じて・全身で表現する」という過程で見せてくれた子ども一人一人の感性に驚いたことを思い出します。

今年度から小学校(中学校は次年度)で実施されている学習指導要領には鑑賞教育の重要性が明確に示され、今、学校では様々な授業を試みています。各美術館もそれぞれのオリジナリティーを生かした鑑賞教育を展開しています。当館にて2003年度より実施している「小中学生の鑑賞教育事業」もより充実してきています。「浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美」展の開催期間中には4つの小学校の

鑑賞教育を実施しました。

小グループで鑑賞リーダーさんと一緒に「見て・感じ・話す」鑑賞方法を学んだ後、各自で「私のお宝探し」をし、そのお宝の作品に子ども一人一人が愛称をつけるというミッションを組んだ学校がありました。子どもはだれもが目前の作品から得た感動を具体的な言葉でストレートに表現する名人です。

- ・レインボーブラック(黒釉壺) ・青龍が空を飛ぶ(青花龍文壺)
- ・鳥と花の急須(青磁象嵌鳥文水注) ・魚の茶わん(鉄砂魚文碗)
- ・ソフィアのピン入れ(瑠璃地墨壺) ・カボチャの壺(白磁白角蓋付壺)
- …等々

どれも私たち大人の想像の域を超えた素晴らしいネーミングです。

鑑賞リーダーの方たちと作品に見入っている子どもたち。その後ろ姿を見ながら、より多くの子どもたちが美術館を訪れ、その瑞々しい感性で「作品と出会い、感じ、自分の言葉で語り合う力」を高めていってほしいと願っています。と同時に、教室における鑑賞教育への支援体制も整え、子どもたちの知的熟成の一助を担うべき学校と美術館との連携を試行・推進していきたいと考えています。

[教育普及担当 藤巻直子]



浅川伯教《黒釉壺》山梨県立美術館蔵(鈴木正男氏寄贈)



《瑠璃地墨壺》朝鮮時代・19世紀 日本民藝館蔵

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。



[時間] 14:00より
(開場は30分前)
[場所] 11階講堂
[定員] 先着150名
(入場無料)

○第6回	11月6日(日)	「酒井抱一と江戸琳派 ～新出資料紹介を中心に」 [講師] 松尾知子(当館学芸員)
○第7回	12月17日(土)	「1923年以降のマルセル・デュシャン」 [講師] 水沼啓和(当館学芸員)
○第8回	1月21日(土)	「瀧口修造 2つの旅とデュシャン」 [講師] 水沼啓和(当館学芸員)
○第9回	2月18日(土)	「田中一村～寄贈・寄託作品展より(仮称)」 [講師] 松尾知子(当館学芸員)

◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]

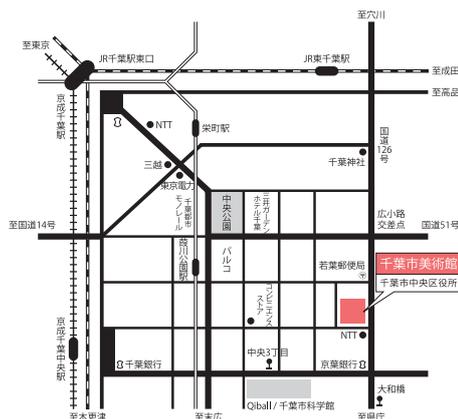
- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎編集後記

今号にてC'nが選暦を迎えたこともあり、表紙デザインを一新しました。「生誕250年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」特集号はいかがでしたか？松尾学芸員渾身の大作回顧展、大幅な展示替えも行いますので、2度3度と足を運んで頂ければ幸いです。(リピーター割引や友の会のご利用がお得です！)また、今夏の大奮闘「グリーンカーテン作り」も、失敗をふまえて来年再チャレンジする所存です。何か良い案がありましたらお寄せ下さい。(追記：9月21日の台風15号によってカーテンの一部がとれてしまいました。)



[交通案内]

- JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
[発行日] 2011年10月7日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

